

漢字教授法一案

「漢字系統樹」と「漢字イメージトレーニング」

善如寺俊幸（東京外国語大学 留学生日本語教育センター）
zennoji@tufs.ac.jp

0. はじめに

漢字を初めて学ぶ日本語学習者にとって、漢字学習は我々漢字圏に暮らす者の想像をはるかに超える苦行であるらしい。それは原稿用紙の罫目大の漢字がほとんど全て黒丸にしか見えないパプアニューギニアの留学生や漢字を全て提出番号によって覚えようと奮闘していたセルビア（旧ユーゴスラビア）人留学生の例を待たずとも繰り返して述べられ、あるいは教育現場で直面されてきたことであろう。この極端ともいえる二人の留学生によれば、漢字学習の困難は漢字の把握困難な特性に尽きるといふ。つまり漢字は定まらず捉えどころがないから覚えられない。字数が多く、字形も複雑かつ類似していて、読み方も複数あって紛らわしいことなどが把握困難の元凶であるらしい。例えば、「生」を「うまれる」と捉えて安堵していると、いつの間にか「いきる」や「なま」に姿を変えている。あるいは「セイ」と捉えるや数日もたたないうちに、「西」も「正」も「青」も「セイ」と知らされる。漢字を戸籍もしくは家系図のような動きのない相関図に編もうと思いついた契機はこうした非漢字圏からの留学生（日本語学習者）の苦悩する声であった。その漢字の家系図のような相関図を「漢字系統樹」と呼ぶことにする。

「漢字系統樹」を漢字の家系図のような相関図と書いたが、正に漢字の系図で、漢字をパーツに分解して氏素性を探り、その出自を整理して家族や親族にまとめ、系統的に分類したものと考えれば解り易いかと思う。その「漢字系統樹」を系統順に辿って漢字の創成物語を頭に描きながら漢字を学習する方法をスポーツのトレーニング法になぞらえて「漢字イメージトレーニング」と呼ぶことにする。「漢字イメージトレーニング」は上に述べたような、漢字学習に苦悩する学習者を幾ばくかでも救済しようと考えられた教授法である。

以下に章を改めて、漢字の系統的な相関図である「漢字系統樹」と、それを利用した漢字教授法「漢字イメージトレーニング」について解り易く例示しながら述べる。

1. 「漢字系統樹」

漢字はその字形構造上、組み合わせの複雑さで三種類に分けられる。つまり、漢字として分解可能な最小単位のパーツ（漢字の構成要素のことであるが、以降解り易くパーツという。単漢字も含まれ「字素」ということもある。）、そのパーツを最大限に組み合わせた最大単位の漢字（複合漢字）、その中間の最小単位でも最大単位でもないパーツ（複合漢字も含む。）の三種類である。

最小単位のパーツは様々な漢字を形成する最小単位の構成要素となり、最小でも最大でもない中間単位のパーツも自らより複合度の高い、つまりは複雑な漢字を構成するパーツとなる。そして同じ最小単位のパーツから成り立った漢字を集めて、関連する文字同士を最小単位から中間単位、さらに最大単位へと繋いで整理したものが「漢字系統樹」である。その「漢字系統樹」を考えるときには、最

小単位のパーツを第一系統、最大単位の漢字を第三系統、そのいずれでもない中間単位のパーツを第二系統と呼ぶことにする。

尚、「漢字系統樹」を考える上で拠り所とした字解は多くを白川静の字説によっている。

以下に、その「漢字系統樹」の一端を解説を加えながら例示してみる。

1-1. 「漠」

例えば、「砂漠」の「漠」は「氵」と「莫」から構成されていることは容易に解る。「氵」は「水」の字形を横に寝せて簡略化したもので、「水」を表し、「水」と同様これ以上分解すると意味をなさない最小単位のパーツである。しかし「莫」はさらに「艹」と「日」と「大」に分けられるので、最小単位でも最大単位でもない中間単位の字ということになる。この「莫」の「大」は古代の漢字によって「艹」の変形したものと解っているので、「莫」は「艹」（艸＝草）と「日」（太陽）と「艹」（艸＝草）から構成されていることになる。「艹」（艸）も「日」もこれ以上分けると意味をなさなくなるので、最小単位のパーツということになる。このように考えると、最大単位の漢字である「漠」は最小単位のパーツ「水」と中間単位の「莫」より成り、「莫」は「艹」と「日」で構成されていることが解る。そして「莫」は草間（艹）に沈む太陽（日）、つまり日没を表すので、「莫」は太陽を表す「日」を中心にして成立している漢字といえる。第一系統の「日」を中心にして成り立っている漢字のグループを「日」群とし、その第二系統の「莫」を共通のパーツにするものを「莫」系と呼ぶなら、「漠」は「日」群の「莫」系に属する第三系統の漢字ということになる。「莫」系に属する第三系統の漢字は他にも「暮」や「幕」などがある。これらを解り易く、第一系統、第二系統、第三系統の順に図示すると次のようになる。

「日」－「莫」－「暮墓幕募慕模膜漠」

このように漢字を字形構造的に分類して系統だてた関係図が「漢字系統樹」である。第二系統の「莫」の字音「バク」や原義は概ね同系の第三系統の漢字へと繋がっていることが見て取れよう。

1-2. 「揮」

1-1.の「漠」と同様の手法で「揮」を分解すると、まず「扌」と「軍」に分解可能である。「扌」は「手」を偏として使う時に変じる形で最小単位のパーツ（第一系統）であるが、「軍」は戦車（馬車）を象った「車」の上に軍旗がはためく形を表す字である。白川は「軍」を軍旗翻る戦車を表す全体象形の字とするが、そうだとすると「軍」は「車」より成る字であることに変わりはないので、「車」を第一系統、「軍」を第二系統に分類する。そもそも「冫」は布などで上から覆う形を表すパーツで、「軍」においては戦車である「車」を覆うようにはためく軍旗を表したものである。その軍旗を手に采配を揮い、指揮をするのが「揮」である。また細かい話になるが、篆文に倣った本字が「冫」ではなく「冫」を用いていることから諸橋や[説文解字]は包圍する形とするが、篆文よりさらに古い金文では、なびく吹き流しや旗などの形である。

このように「揮」を考えると、「揮」は「車」群の「軍」系に属する第三系統の字ということになり、「揮」と同様の第三系統の字を連ねて、系統樹に表すと以下のようなになる。

「車」－「軍」－「揮運輝」

1-3. 「政」

同様に「政」を考えると、まず「正」と「攴」に分けられる。「攴」は本来「支」と書き、「又」（手）に「卜」（小枝）を持つ形で、竹や木の小枝で打つことを表す。「卜」はそもそも獣骨や亀の甲羅を焼いて行う占いで生じるひび割れの形を表し、「支」の「卜」とは元来同一とは言えない（甲骨文では異なる字形も、やがて類似するもの同士統一されていった。）が、ここではその形状を表すもので、卜形をした竹や小枝と考えられる。ついでに言うとも「支」も十字形の枝を持つ手（又）を表すが、枝分かれした小枝に焦点が当てられている。

「正」の方は「止」に「一」を加えた字である。この「一」は甲骨文や金文などでは「口」あるいは「■」と書かれていた字で、都市の城郭を表している。「止」は足形を表す字で、単漢字としては「止まる」意味であるが、パーツとして用いる時は「行く、進む」の意味を表すことが多い。したがって、「正」は城郭に囲まれた敵国の首都に向かって進軍することを表す字である。攻撃する国が、あくまで正義は自国の側にあり、敵の不正を正すための攻撃であるとする戦争の論理はいつの世も同じであるらしい。「正」は「正す」、「征」は敵を正すために行く（彳）こと、そして征伐し征服した後に行うのが「政」（まつりごと）である。「攴」は小枝で鞭打って意のままにすることを表している。「牛」を鞭打ってコントロールするのが「牧」で、「子」を鞭打って教育するのが「教」であるようにである。

いささか横道に逸れたが、「政」、「征」、「正」、「止」を系統樹にすると、以下のようになる。

「止」－「正」－「征政」

さらに同系の第三系統の字を加えれば、以下のような漢字系統樹ができよう。

「止」－「正」－「征政整証症」

1-4. 「攴」「攴」「支」「反」

「攴」のことを述べたついでに、その第一系統の「又」を核として成り立っている漢字群についても、少しまとめておく。1-3. で述べた通り、「攴」は「又」に「卜」を加えた第二系統（中間単位）のパーツで、それにコントロールするものを加えて「牧」や「教」が成るので、その系統樹は次のようになる。ただ、「政」や「放」については字音を表す「正」、「方」が主要パーツなので、「止」群、「方」群に配する。

「又」－「攴」－「牧教」

これに対して「攴」は同じ「打つ」でも、死に至らしめるほどに強く打つ、つまり撲殺するほどに打つことを表す。この系統に属する「殺」を見れば解り易い。左半の偏は甲骨文や金文、あるいは古文などからも全体で、呪霊が強く祟りをなす（と信じられていた）獣（滅多に人と遭遇しない夜行性動物と考えられる）の形であることが知られている。したがって「殺」はそうした獣を撲殺し、かけられた呪詛を相殺あるいは滅殺する呪儀を表すと考えられている。この「攴」系の第三系統の字は「殺」の他に「兵役」の「役」や「投」などがある。これらを系統樹にまとめると次のようになる。

「又」－「攴」－「殺役投設疫」

「支」は先に述べたように、手（又）に十字形に枝分かれした枝を持つ形を表し、枝の意味である。

「支」系の第三系統の字は「枝技肢」などがあるので、その系統樹は次のようになる。

「又」－「支」－「枝技肢」

「又」群の漢字系統樹の形をより解り易く示す都合上、比較的数の多い「反」系についてもまとめておく。「反」は反り返った崖（厶）に手（又）をかけて登ることを表す。急峻な崖の上は神の宿る

神聖な場所と信じられていて、そこへ登ることは神を汚す反逆行為とされていた。ただ、手（又）でものを反転させることを表すという〔説文解字〕の字解も俗だが解り易い。第三系統には「板」や「坂」などがあって、その系統樹は以下のようになる。

「又」－「反」－「板坂阪飯版販返」

以上、「又」群の「攴」系、「攴」系、「支」系、「反」系をまとめて示すと以下のようになる。無論、「又」群にはこの他にも「及」系や「攴」系などがあるが、ここでは漢字系統樹の解り易い例示が目的なので、省く。

「又」－「攴」－「牧教」

「攴」－「殺役投設疫」

「支」－「枝技肢」

「反」－「板坂阪飯版販返」

2. 「漢字イメージトレーニング」

漢字は三千年以上前に中国で誕生した文字であることは周知のとおりである。とするなら各々の漢字には古代中国を背景にした壮大な誕生物語があるというのも頷ける話である。漢字の各パーツには一つ一つに意味があり、その組み合わせで構成される漢字の字義や字音を担っていてもいる。そしてパーツの組み合わせ自体がそのまま漢字の創成を物語っていることも多いのである。

「漢字イメージトレーニング」は、そうした漢字の特性を利用し、最小単位のパーツから最大単位の漢字へと「漢字系統樹」を辿り漢字の誕生物語を学びながら包括的に漢字習得を目指す学習法である。漢字のパーツパーツに三千年以上歴史を遡って古代中国の社会や習俗、信仰の姿を透かし見ながら漢字をイメージする練習を積み重ねていくのである。そうすることによって漢字を通して物語られる、神々を祭る儀式や神の降臨や神に捧げる犠牲やその祭肉にまつわる世界が自ずと読み解けるようになる。現代の硬化閉塞した科学一辺倒の、あるいは一神教的世界を越えて自由に古代に思いを巡らせ、古代世界を思い描く、白川流に言えば「漢字の世界に遊ぶ」方法を会得するのである。

ただ、最初に、漢字を構成する最小単位のパーツから学習するために、日本語初級テキストの提出語彙とのずれが生じてしまう難点がなくはない。例えば、「弓」「矢」「刀」「羊」「糸」「竹」「草（艹）」などはすぐに思い浮かぶそうした例である。日本語の初級テキストには「庭に犬がいて、庭の池に魚がいる。」のだが、また有難いことに「牛」や「豚」や「鳥」も肉となって登場できるのだが、「羊」まではお鉢が回ってこない。「弓」や「矢」なども同様である。しかし、これらは漢字学習からすれば必須のパーツなので、外すわけにはいかない。日本語初級テキストの語彙に加えるか、漢字クラスで補うしかあるまい。先に「弓」が導入されていれば、「強」が戦闘用の強い弓を表し、「弱」が装飾を施した儀礼用の弱い弓を表すことも容易に納得できようし、逆に「弓」という手掛かり無しに「強」「弱」を学ぶ時の労苦や非効率は想像に難くない。

こうした漢字学習の入門編ともいえる百字ほどの最小単位の漢字が正しく書けるようになれば、そしてその変形の規則を知れば、その組み合わせに過ぎない複合漢字も容易に認識でき、書けるようになるのである。

以下に、「漢字イメージトレーニング」の具体的な例を述べてみる。

2-1. 「車」

漢字の「車」は車の形を象った字であるからといって、導入する際に自動車の絵図や映像を与えたとする。そのとき既に自動車をどう象れば「車」になるのか納得できない学習者もいようが、表立って疑問の声も上がらずうやむやのままやり過ごせたとしても、いよいよ「軍」を学ぶ段になると、学習者によってはもはや単なる疑問ではなく疑惑となる。なぜ「車」が「軍」なのかと。ましてや「揮」を学ぶ段になると、どうにもイメージしようがなく身動きとれなくなる。

やはり、「車」は戦車（馬車）である。したがって「車」の導入には古代ローマの戦車でも良いし古代中国の戦車でも良いから、上方から見た戦車の絵図や映像を、「軍」の導入では軍旗はためく戦車の映像を与えるのである。そうすれば、軍旗を手に持って指揮するのが「揮」で、それによって軍が動くのが「運」であると納得され理解されるのである。

2-2. 「高」「正」「韋」

古代中国では古代ヨーロッパやアフリカ北部の都市と同様、周囲を城郭で囲っていた。これは戦争に備えた都市の形であるが、今に残る西安などの城郭の映像やその城郭をくり抜いた城門の上にそびえる望楼の映像を見せながら、望楼と「高」、城郭都市に向かって進軍する軍隊と「正」を結びつけてイメージできるように練習する。そうすることによって、そこを「征」服し、その民を支配し、「政治」を行うことも容易に連想される。また城郭の中には王宮があり、その周りを兵士がパトロールする様子を「韋」によってイメージできるようにすれば、巡回する兵士の方向が南門側と北門側で「違」い、東西南北（行）を防衛するのが「衛」であることも容易に解るのである。

2-3. 「王」「士」

博物館や歴史図鑑にある鉞の映像を見せながら、その象形が「王」の象徴であったこと、やや小ぶりの鉞が「士」で、古代中国の武士の象徴であったことを理解させる。それを持つ武士の絵図などと「士」が容易に結びつけられるようになれば、「王」に「士」が「仕」えることも容易に解らるだろう。

2-4. 「示」「阝」

地鎮祭の飾り付けの祭卓、神社や教会の祭壇などの映像を見せて「示」をイメージさせる。そうすれば、神を祭る「示」から、肉を供えて行う「祭」や祖霊を祭る「宗」家（本家）、神の祭られた林へは進入が「禁」じられることも容易に連想され得る。

また、祭りに誘われ天から神が降臨するときに使うのが神梯（神の階段）で、それを表すのが「阝」（こざと）である。出雲の古代の神殿図や神楽で神木にかけた梯子などの映像を見せながら、「阝」（こざと）と結びつけてイメージできるようにすると良い。そうすれば、神の「降」臨する聖域と祭を行う俗域の境が「際」で、降臨する聖なる坂が「阪」で、降臨する場所を死体（方）で清めて悪霊を防ぐのが「防」などということが理解されるようになるのである。

3. 「漢字イメージトレーニング」の授業

では、実際の授業はどのように行われるかという、一字を一分ないし三分で導入する。導入にかける時間に幅があるのは、同系統の漢字ならば同じ創成物語に共に含まれ、まとめて導入できるので、個々の導入時間を必要としない場合もあるからである。テキストに「漢字イメージトレーニング500」を使用する場合は丁寧な筆順がのっているので、一度板書して書写の注意点を述べるだけで、授業中

に特段の書き練習はしない。書き練習は、導入した日の宿題で漢字練習シート¹に一字につき二回か三回ずつ丁寧に書いて提出させる。それを毎回添削して返却する。授業では映像などの資料を示し、もっぱら導入漢字が属する系統の既習漢字との関連や、導入漢字の創成物語（漢字の成り立ち）をイメージさせながらその字形、字義、字音、用法の習得を目指すのである。復習クイズは導入字数に応じて出題したものを毎回行う。週五日毎回三十分十字ずつ導入と復習クイズを行う場合、週四日毎回四十五分十五字ずつ導入し復習クイズを行う場合、あるいは漢字クラスを週二日九十分ずつ設けて各回に三十文字ずつ導入し復習クイズを行う場合などがあるが、いずれにしても書き練習の宿題で字形矯正ができていますので、字形の間違ひは少ない。復習クイズの他に時間の許す限り、五十字あるいは百字学ぶごとに五十字テストや百字テストを行えばさらに習得効率は上がる。習得効率低い学習者に対しては、やはりその学習者のペースに合わせて丁寧な導入を図るのが効果的であるが、そうした補習時間を確保できるかが課題となる。

なお、テストの評価は八十パーセント以上をA合格、それに満たない七十パーセント以上をB合格、七十パーセント未満であれば不合格とする。B合格の受講生には再受験を勧めA合格を目指させるとよい。

こうした「漢字イメージトレーニング」による漢字学習の最大の利点の一つは漢字の積み上げ式学習が可能になることである。習得が滞れば、既習のパーツとなる漢字を復習することによって解消できる場合が多いし、やがて漢字クラスを終えて独習しなければならなくなった際にも授業で学んだのと同様の方法で自律的に学習が続けられるようになっている。

以下に、「漢字イメージトレーニング」による授業の実際をガイダンスと三つの類型（授業スタイル）に分けて紹介する。ただ、これらのやり方は一つだけ選んで行うものではなく、導入する漢字に応じて、効率よく使い分けたり組み合わせたりしながら行うべきものであることを確認しておきたい。

3-1. ガイダンス

最初の授業では、授業の進め方と同時に漢字という文字について包括的に学ぶ時間を設けると良い。非漢字圏の学習者にとっては全く未知の文字で、しかもテキストにある漢字数だけでも充分に不安を感じてしまうからである。そこでまず、漢字については以下のような項目を、学習者に質問しながら問答式でまとめると良いだろう。

1) 漢字はいつ頃できたのか。

最古の漢字は今から三千四百年ぐらい前の殷代に使用されていた甲骨文（甲骨文字）とされるが、それはどんな時代であったのか。殷墟や甲骨文などとともに、当時の農耕（農具の耜や箕）や建築（版築に用いる槌や床板）、政治（占術）、信仰（シャーマニズム、犠牲）、祭事（祭具）、戦争（武器や武具）、婚礼（夜、夫の家に嫁入り）などについて、映像（NHK制作、大修館書店発売のビデオ教材「遙かなる漢字の旅」やテレビ東京制作の「世界秘境全集」、その他から抜粋するなど）で紹介しながら学習者の知る古代文化と類似するところを、できる範囲で話し合うと良い。

2) 漢字は誰が作ったのか。

¹ 漢字一字につき二柘か三柘の柘目を引いた漢字書き練習用のシート。柘目の大きさは二センチ四方くらいにして、各パーツを丁寧に正確に書く練習をさせる。学習者によっては、最初は四センチ四方くらいの柘目に書かせる場合もある。

中国の説話では漢字を発明したのは黄帝に仕えた倉頡とされるが、実際には神との交信を担っていた聖職者（シャーマン）たちによって、交信の手段として生み出され整えられていったものだろうと考えられている。神との交信は主に占いによって行われ、その結果に神意を読み取っていたようである。

3) 漢字はどんな特性をもつのか。

漢字はパーツの組み合わせにより成っていて、それらのパーツが各々音や意味を担い、成り立つ漢字の字音や字義を表している。パーツの意味や音は複数ある場合もあるが、原則的に使われる漢字によって変わることはない。「彳」や「木」など、偏に使われるパーツは原則的にその漢字の性質を限定する。

4) いくつ（何字）学べば良いのか。

学習する目的によって異なるが、日本の大学で学ぶ学習者は1500字ぐらいが漢字教育の目標となろう。予め学習期間と学習字数の目標を与えると良い。

3-2. パーツ導入型

漢字学習の入門期に特徴的な授業のスタイルである。最小単位のパーツとなる単漢字の導入に用いる方法で、実物や絵図と漢字、あるいは漢字とその意味するものを結びつける練習である。実物やその絵図を見せて漢字（パーツ）を当てさせたり、その逆の練習を、入門期の単漢字の導入を終えた後も、定着するまで、複合漢字のパーツとして登場する度に繰り返し行うと良い。「漢字イメージトレーニング500」を例にすれば、漢字番号1～150に集中的に提出される単漢字や、それ以降も散発的に提出される385番の「主」や394番の「豆」などの導入時だけでなく、414番の「医」など複合漢字の導入の際にもパーツ（この場合は「矢」）の復習を繰り返していくのである。無論この場合、当時は「矢」が武器としての矢であると同時に霊力のある祭具であったことも学ばせねばならない。

3-3. 類推型

パーツの組み合わせから、漢字の意味を考えさせる指導法である。例えば「祭」の導入では、そのパーツが「肉」と「又」と「示」であることを確認し、何を意味するのかを考えさせるのである。「示」は祭壇（祭卓）、「又」は右手であるから、神に肉を供えることを表す字と読み解ければ、それを「祭る」といい、行事として「祭り」ということを導入するのである。そうすれば「禁」を導入する際にも「林」の中に「示」（祭壇）を設けて神を祭れば、そこへの進入が「禁じられる」ことも容易に想像できるし、偏の「阝」が神の階段（神梯）を表し、それを降りて神が天より降臨することを知れば、「際」が神の降臨する聖域と人が神を祭る俗域の境界であることも類推できるのである。他にも、撲殺を意味する「殳」系の「殺役投設疫」や「反」系の「板坂阪飯版販返」などはパーツから漢字を類推させて導入できる好例である。

3-4. 物語型

物語のように話の展開を追って漢字を導入していく方法である。例えば、「昏」はそもそも暗くなって行るのが慣しだった婚礼を表す字であったが、やがて「暗い」意味で使われるようになって、婚礼の意味には、新たに「婚」ができる。婚礼における新郎新婦を表すのが「夫」と「妻」で、それぞれ婚礼での格好を示す象形である。妻となった「女」は何をするかと言えば、日本式に言えばお宮参

りである。つまり夫の氏族の神（祖霊）に参り、庇護を願うのである。そうして安全を得て安心するのが「安」である。やがて「子」ができて「母」となる。「子」ができたらどうするか。やはり祖霊に参って、神の庇護を願い、命名しなければならない。それを表すのが「字」である。「宀」は祖廟（祖霊を祭った社）の屋根の形を表し祖廟を意味する。このような結婚や出産に関する儀礼はどの文化にも共通してあり、また驚くほど似ている。そのため物語のように次の展開を学習者とともに追いながら、漢字の導入ができるのである。婚礼に絡んでは嫁ぐ「嫁」や祖廟を掃き清める「婦」などもあるが、レベル的に「母」や「子」と同時には導入しないので省いた。

他にも、神殿の門の前（神と自分の「間」）に肉（月）を供え（古くは「門」の中に「月」を書いた）、神に「問」うて、神の声（音）を「聞」くという展開や、胸に玉を置いた死者（袁）が霊「園」に葬られ「遠」い神の国へ旅立つという展開、敵国を「正」すために「征」服し、その民をコントロールするのが「政」で、税を徴収したり、占領国の神を祭らせたりするという展開など数多くある。²

4. おわりに

二十数年前にふとした留学生との出会いを契機に着手した「漢字系統樹」も幾度となく迷走と停滞を繰り返しながら、最後の最後に白川静の字説によって息を吹き返し、今やかなり確かな道筋ができてきたように感じられる。その「漢字系統樹」が同時に興味深い漢字教授法をも示唆していると確信したのは白川の字説による再生の後であるから「漢字イメージトレーニング」は白川の字説抜きには考えられない。

一方で、時間を節約して漢字学習を専ら宿題に委ねるという方法もなくはない。現にそうした方法で過不足なくカリキュラムが進められている場合もある。漢字を苦もなく機械的に覚えられる学習者にとって「漢字イメージトレーニング」は時間効率の良い学習法とは言えないかも知れない。確かに漢字自体の習得には歴史的背景は不可欠ではないし、歴史的背景の学習に費やす時間を漢字そのものの学習に充てた方が効率的な場合もあろう。しかし繰り返すが、「漢字イメージトレーニング」はあくまで漢字学習に苦悩する学習者の救済として考え出された方法で、いわゆる漢字嫌いの学習者に漢字学習の面白さや楽しさを伝えようと考案された教授法であり学習法なのである。漢字にまつわる好奇心を刺激し、好奇心を満たす喜びを味わいながら学習する方法で、時間的効率より習得効率を重視した学習法といえるかも知れない。それは、もはやクラスに出る必要のない漢字圏の留学生がなおもノート片手に参加したくなる魅力を持っている。受講した学生の、漢字学習に喜びを見だし、学習意欲が増し、自律的学習に繋いでいけたという評価³には「急がば回れ」の効率良さを改めて教えられた気がするのである。

長年変わることなく背中を押し続けてくれた留学生、国内を問わず世界各国で奮闘している教師仲間

間に紙面を借りて心より感謝申し上げます。

² 『漢字イメージトレーニング 500』の「漢字物語」や「もっと知りたい漢字の話」などを参考にされたい。

³ 1994年から1998年までの5年間に東京外国語大学留学生日本語教育センター学部進学予備課程で学んだ留学生のうち、「漢字イメージトレーニング」の授業を受けた学生で、調査に回答してくれた学生の84パーセント（25名中21名）が「漢字イメージトレーニング」による授業がのちの漢字自律学習を助けたと評価している。これに対し、従来型の書き練習中心の授業では、同様の評価をした受講生は50パーセントほど（81名中40名）であった。

本稿は第34回JSL(Japanese as a Second Language Kanji Research Group)漢字学習研究会(2011年9月17日、国際交流基金日本語国際センターホール)で行った講演の内容をまとめた「漢字系統樹と漢字イメージトレーニング」(『JSL漢字学習研究会誌 第4号』掲載)に若干加筆したものである。

参考文献

- 阿辻哲次(1994)『漢字の字源』講談社現代新書
阿辻哲次(1989)『漢字の歴史』大修館書店
尾崎雄二郎編(1993)『訓読説文解字注』東海大学出版会
白川静(1987)『文字逍遥』平凡社
白川静(1995)『字訓』平凡社
白川静(1996)『字通』平凡社
白川静(1999)『中国古代の文化』講談社学術文庫
白川静(1999)『中国古代の民俗』講談社学術文庫
白川静(2000)『漢字』岩波新書
白川静(2000)『漢字百話』中公新書
白川静(2001)『白川静著作集2 漢字II』平凡社
白川静(2000)『白川静著作集3 漢字III』平凡社
白川静(2001)『白川静著作集4 甲骨文と殷史』平凡社
白川静(2001)『白川静著作集5 金文と経典』平凡社
白川静(2003)『漢字の世界1』平凡社
白川静(2003)『漢字の世界2』平凡社
白川静(2004)『新訂字統』平凡社
善如寺俊幸(2003)『『日』の漢字系統樹』『東京外国語大学留学生日本語センター論集第29号』
善如寺俊幸(2008)『『又』の漢字系統樹1/3』『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集34号』
善如寺俊幸(2008)『『又』の漢字系統樹2/3』『柏崎雅世教授退職記念論集』ひつじ書房
善如寺俊幸(2008)『『又』の漢字系統樹3/3』『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集35号』
善如寺俊幸(2010)『漢字イメージトレーニング500』三恵社
陳舜臣(1999)『中国の歴史』講談社文庫
藤堂明保(1965)『漢字語源辞典』学燈社
水上静夫(1995)『甲骨金文辞典』雄山閣
水上静夫(1998)『漢字誕生-古体漢字の基礎知識』雄山閣
諸橋轍次他(1982)『広漢和辞典』大修館書店
山田俊雄他(1992)『大字源』角川書店
段玉裁(1993年版)『説文解字注』上海古籍出版社
許慎(中華民国75年版)『説文解字真本』台湾中華書局